

第 23 回目 すべての聖徒とともに知るキリストの愛

〔聖書箇所〕【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 3 章 14～21 節

- 14 こういうわけで、私はひざをかがめて、
- 15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。
- 16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。
- 17 こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。
- また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、
- 18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、
- 19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、
- あなたがたが満たされますように。
- 20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、
- 21 教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

## はじめに

●エペソ人への手紙には二つの大きな祈りがあります。一つは第 1 章にあるもので、パウロは神のキリストにあって建てた救いの偉大で壮大なご計画について書いた後で、エペソの聖徒たちがキリストの栄光の富の豊かさについて知る事ができるように、また神の力がいかに絶大であるかを「ひとりひとりが」知ることができるようにと祈りました。

●ところが第 3 章では、個別的ではなく、すべての聖徒とともに、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるか、その人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができるように一つまり共同体としてその愛を経験できるように一と祈っているのです。さらに言うなら、「キリストのからだという共同体を建て上げるためのとりなしの祈り」と言えます。今回は、この祈りについて学んでみたいと思いますし、学ぶだけでなく、実際的にキリストの愛を共に経験できるようにされていきたいと願っています。

### 1. すべての父権(家族)の源である父

●まずは、14～15 節を見てみましょう。

- 14 こういうわけで、私はひざをかがめて、
- 15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。

●「こういうわけで」というのは、その前にパウロがこれから祈ろうとする祈りを支えるものがあるわけです。ここでは、パウロが神から直接、直に示されたキリストの「奥義」が前提となっています。その「奥義」とは、ユダヤ人も異邦人もともに共同の相続人となる、ともに神の約束にあずかる者となるという神のご計画です。ユダヤ人は異邦人を「犬」と軽蔑していましたので、異邦人も「ともに」ということは受け入れ難いことであったことを話しました。詩篇 133 篇にも「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんといい楽しさであろう。」とあります。その祝福は末広がり流れ、とこしえのいのちの祝福が主から命じられています。神の民ユダヤ人たちは、おそらくここにある「兄弟たち」を自分の同胞のみにだけ考えていたのです。しかしそれが全く違っていることをパウロは示されたわけです。

## (1) パウロを変えたダマスコ経験

●パウロがいろいろな教会に宛てた手紙を調べてみると「互いに」とか、「ともに」という言葉がとても多いことに気づきます。このことばは共同体用語です。もちろんその「互いに」とか「ともに」という範疇にはユダヤ人も異邦人も含まれているわけです。パウロがこうしたことばを使うようになったのは、単に、神から直に示しを受けたからということだけではありません。人の温かなぬくもりに触れたからです。

●使徒の働きに三度記されているパウロの回心の記事において、復活されたイエスは、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」と彼に呼びかけています(9:4、22:7、26:14)。この呼びかけは、復活のキリストがご自分と教会とを同一視され、切っても切れない関係にあることをパウロに認識させるためでした。すでに定められてあったパウロのための計画はダマスコで告げられます。主はダマスコの聖徒アナニヤを通して、パウロが今後、何をすべきかを告げられました。それはナザレのイエス・キリストの証人となり、地の果てまでキリストの福音を伝えるというものでした。

●ここで注目したいことは、行き先も分からずに暗黒の中にいたパウロのもとに、主によって、アナニヤが遣わされ、「兄弟サウロ。見えるようになりなさい。」と言って、パウロの頭にあたたかい手を置いたことでした。サウロはこのことばによって自分の犯した罪が赦されて、主の共同体の中に受け入れられたことを経験したのです。この経験はパウロの生涯にとってきわめて重要な経験であったと思います。パウロのもとに主がアナニヤを遣わすことにより、彼はキリストを土台とした聖徒の愛の交わりに触れたのです。さらには後に、バルナバはパウロをアンテオケ教会の教師として紹介し、その働きに導きました。

●聖書だけでは人々を強くすることはできません。人の愛の手と心が必要です。教会内の主にある温かな交わりは、神様の恵みの手段であるゆえに尊重しなければなりません。特に、新しい方、初心者の方が、天を開かれて神の祝福を受けるためには、主にある兄弟姉妹たちの手のぬくもりがどうしても必要です。熱は光と同じように、たましいの成長において絶対に必要です。そして説教者は真理の光を与えることができます。しかし光の別な面である熱の部分、具体的には兄弟たちの中から供給されなければなりません。交わり、すなわち接点の各点、パウロの言う「すべての間接」は神の恵みを受ける経路です。使徒パウロにとって愛の交わりがすべてでした。それゆえ彼の手紙は、「ともに」「互いに」をはじめとする交わりのことで埋め尽くされているのです。信徒同

士を堅く結び合わせ、地方の各教会を、そしてユダヤ人の教会と異邦人の教会を堅く結び合わせることに、そこにこそパウロのとりなしの祈りがあったのです。

## (2) すべての父権の源泉である父

14 こういうわけで、私はひざをかかめて、

15 天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。

●「**天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父**」・・・とても長い名前だと思いませんか。1章では、「私たちの主イエス・キリストの父なる神」でしたが、ここでは「天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父」と呼んでいます。ある人はこう述べています。「父」はギリシア語で「パテール」(πατήρ)。「家族」と訳されているギリシア語は「パトリア」(πατριά)、つまり「パテール」「パトリア」という二つの言葉は本来、密接な関係をもっていることばです。つまり、家族とは単なる家族ではなく、本来、明確な父権によって存在する家族という面が強調されています。聖書的な家族(家庭)とは父権のある家族を意味しているのです。

●数年前に出版された本のタイトルに「父権の喪失」というのがありました。現代は「父権が欠けている」ということですが、「父権」とは何なのでしょう。それは「甲斐性」(かいしょう)があるという意味です。甲斐性とは、頼りがいがあること、ものごとをはっきりと決断する責任とそれを負っていく力があること・・・等です。大黒柱もそれに近いことばと言えるかもしれません。

●夫婦で喧嘩になる要因となることばがあるそうです。夫が妻に向かって言うことばとしては、「だれのおかげで飯が食えるんだ」、だそうです。共稼ぎの夫婦では決して口から出てこないことばでしょう。専業主婦の家庭の場合のみに言えることばなのではないでしょうか。しかし専業主婦も黙っていません。「ご飯を作る私のおかげでしょう。」と、火に油を注ぐことばのやりとりで喧嘩に発展するわけです。ちなみに、妻が夫に向かって言うことばで喧嘩になるその筆頭は、「甲斐性なし」だそうです。「甲斐性がない」とは、意気地がない。不甲斐ない。いざというときに頼りにならない。責任を取ろうとしない。稼ぎが少ないという意味も大きいです。この「甲斐性なし」ということばは、なぜか男性にしか使われないことばです。それだけ、男性には甲斐性が求められているわけです。「甲斐性」ということばは、「積極的、主体的に責任を果たそうとする気力」を意味します。

●新改訳聖書では「家族」と訳されているギリシア語「パトリア」は、父権を強調する家族を意味すると言いましたが、天においても、地においても、そこには父権を持つ存在がいるのです。つまり甲斐性のある存在、リーダーと言われる存在がいるのです。悪の世界でもサタンをリーダーとする悪霊たちの組織的な階級があります。私たちの国、職場、学校、そして家庭、家族にも父権を持つ存在がいます。父親がいなければ母親がその家庭の父権を持ちます。いろいろな家族がいます。母子家庭、父子家庭、再婚家庭、ひとつの家族、共同体、組織、すべてにおいて父権が必要です。それは責任を伴う者であり、決断と配慮が求められます。今日、家庭が崩壊している現実の背景には、父権を持つべき者が甲斐性を喪失しているからだと思います。父親が一生懸命働くことが

## אגרת שאול אל האפסים

精いっぱい、子どもの教育は母親任せ、家に帰ってくれば疲れてただ休むだけ。子どもにしっかりと向き合う力は使い果たして帰ってくるので、妻も子どももそのうちに期待しなくなる。やがては粗大ゴミ同然の扱いとなるという悲しき現実があります。父親が「だれのおかげで飯が食えるんだ!」と強がっても、妻や子どもたちにとっては、単なるお金を運んでくる鳥のような存在になっているのでは・・・。「父権の喪失の時代」と言われても、こんな社会にだれがしたと嘆くしかありません。

●そうした現実の中で、もう一度、パウロが言ったことばを考えてみましょう。彼は神のことを「天上と地上で家族(父権)と呼ばれるすべてのものの名の元である父」と言っているのです。この父は、完璧な父権をもって私たちにいかかわって下さる方なのです。この父こそ最も甲斐性のある方ではないでしょうか。最も頼れる方、責任を果たす力ある父の存在がいること自体すばらしいことです。この地上で父権が与えられている者はすべて、その創始者である父なる神に倣わなければなりません。最高の父権をもった父、永遠の父権をもって統べ治められる父の前にパウロは祈っているのです。しかもその祈りは、奥義(神のご計画)を知らされたパウロの祈りであるゆえに、神のご計画が実現する夢を見ながら、そのあふれるばかりの圧倒的な神の豊かさを垣間見ながら祈っているのです。私たちの祈りとはあまりにも次元が違うことを感じさせられます。

## 2. パウロの祈った祈り

●すべての父権(父性)の源である方の前でなんと祈っているかに注目してみたいと思います。16節以下をもう一度、読んでみましょう。動詞に注目しながら。「どうか」で始まる祈りは、以下のとおりです。

- ①16節末尾の「強くして下さいますように。」(原文は「強くされること」)
- ②17節中央の「住んでいて下さいますように。」(原文は「住むこと」)
- ③19節中央の「知ることができますように。」(原文は「知ること」)
- ④19節末尾の「満たされますように。」(原文は「満たされること」)
- ⑤22節の「栄光がありますように。」(原文は「～に栄光」)

●こうして見ると五つの願い(嘆願)が並んでいるように思いますが、実は、内容的には四つの事柄です。しかも、それぞれが別々の事柄として並べられているのではなく、むしろ積み重なるように、つまり次第にクライマックスへと登り詰めるように並べられているということです。キリストが一人ひとりの心の内に住んでくださるという祈りは、他の聖徒たちとともに、人知をはるかに越えたキリストの愛を知るためであり、さらにそれは、神の満ち満ちた豊かさに満たされていくためなのであり、そのことによって、すべての源である御父に栄光が帰されるようにと祈っているのです。

### (1) 「あなたがたの内なる人」の解釈

●ここで、パウロの祈った祈りの中身について見てみましょう。まず、最初に16節の「内なる人」とは何かという問題です。「あなたがたは」は複数形なのに、「内なる人」は定冠詞のついた単数形で書かれています。

「内なる人」という表現は、新約聖書にはここ以外に2箇所しかありません。

- ①ローマ書7章22節「すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでるのに」

②Ⅱコリント書 4 章 16 節「たとい私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされている」

●コリント書から考えていくと、内なる人とは、外なる人と比べて、内面的な人、心とか魂とか、靈的な面の部分として解釈されます。ローマ書から考えていくと、内なる人とは、聖霊によって新しく生まれ変わった人と解釈します。ところがエペソ書では、結論的に言うと、「内なる人」とは**イエス・キリストのことを**意味します。というのは、ギリシア語原文では「あなたがたの内なる人を強くしてください」と書かれているのではなく、「あなたがたの内なる人へと強くしてください」と書かれているのです。「を」ではなく、「～へと」（「イエス」 εις）なのです。つまり、あなたがたのうちに住んでいる内なる人、イエス・キリストへと（～に向かって）強くされますように、という意味の祈りなのです。「内なる人(単数)」は私たちが強くされていくゴール(目標)なのです。エペソ書の他の箇所でもキリストのからだなる教会の成長のゴールは、キリストです。それははっきりとしています。ですから、「あなたがたの内なる人を強くして下さいますように。」という祈りは、あなたがたのうちにおられるイエス・キリストがあなたがたのうちでますます強められますように、という意味です。そう考えると、17節前半の祈りー「こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。」ーは、16節の言い換えであることが分かります。前にも、パウロは同義的パラレリズムを使う達人であることを話しました。

●17節の「こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。」という祈りは、私たちが内なるひとりの人、すなわち、キリストへと強められることは、キリストが私たちの心のうちに住み込むことだということです。主語が変わっているだけです。主語を変えて同じ内容を言い換えているのです。

## (2) キリストが心に住むとは

●「住む」ということは、出たり入ったり、あっちに行ったりこっちに来たりではなく、腰をおろして定住することを意味します。別の言葉で言うならば、「とどまる」ことを意味します。キリストが私の心に定住すること、しかし心の隅にではなく、王座についていただくことを意味しています。パウロはそのことを祈っているのです。あなたがたの内なる人、すなわちキリストへと達していくように強められることを祈ったパウロは、言い方を変えて、内なるキリストがなにか寄留者であるかのように、間借り人であるかのようにではなく、本当の住人となったださるよというの、この祈りの意味するところです。

●キリストが私たちの心に定住して下さるといことは、具体的に言うならばどうということなのでしょうか。

①イエス・キリストが私たちの中で支配的になることを意味します。

- a. キリストの平和が私たちの心を支配すること。
- b. キリストのことばが私たちのうちに豊かに住まうこと。

②小さな者たちを受け入れることを意味する。

特に、小さな者に対する尊重と愛・・「まことにあなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さな者にしたのは、わたしにしたのです。」(マタイ 25 章 40 節)

③キリストの愛に根差した歩みをする

### (3) すべての聖徒とともに知ることの大切さ

●今回お話しする最後のポイントは、キリストの愛をすべての聖徒たちとともに知ることの大切さです。聖書だけでは私たちをキリストのような愛の人に変えることはできません。パウロが神から遣わされたアナニヤから「兄弟サウロ」と呼びかけられたことを思い巡らしてみてください。「天からの光」だけではパウロを変えることができないことをイエシュアは知っておられたのではないのでしょうか。ですから、アナニヤという弟子をパウロのもとに遣わしたのです。彼は、パウロに対する神のご計画を伝えるとともに、主にある兄弟として赦し、受け入れたのです。これがパウロをして目からうろこが落ちることとなったのだと信じます。

●隣にいる人を愛することのできない教会員が、どうして関係の薄いはるか遠くの人々を愛することができるでしょうか。主にある教会の兄弟姉妹たちの間に、主の弟子たちのうちに愛が燃えることなしに、どうして世界に良きおとずれが伝えられていくのでしょうか。使徒パウロにとって愛の交わりはすべてでした。それゆえ、彼の手紙は、交わりのことで埋め尽くされているのです。私たちを主イエス・キリストと結び合わせ、また同時に、信徒同士を結び合わせ、ユダヤ人と異邦人を結び合わせ、地方の教会を堅く結び合わせることにこそパウロのとりなしの祈りの目的がありました。

●教会は愛を育てる訓練場です。ここで主にある者たちは改造されていきます。時には辛いところを通る経験をするかもしれませんが、神がすべての配剤をもって、私たちに人知をはるかに越えたキリストの愛を経験させていくのです。それゆえ、「すべての聖徒とともに知る」ということばがあるのです。クリスチャン同士の愛の交わりを築くことが神のご計画なのです。

- ①広さにおいて・・・包容力を表す愛、どんな人でも受け入れる寛容な愛
- ②長さにおいて・・・忍耐力を表す愛、すべてをがまんし、信じ、期待し、すべてを耐え忍ぶ愛
- ③高さにおいて・・・常識を超えた(アブノーマルな)神の愛、この世ではあり得ない至高の愛
- ④深さにおいて・・・救い難い罪人をも救い上げる深淵なる愛

●すべての父権の源であられる御父は、以上のような愛をその家族の一人ひとりに対して培ってくださる方です。それゆえ、私たちもパウロの祈りに導かれて、キリストを心の中に豊かに住まわせ、キリストの愛に根差して、人知をはるかに越えたキリストの愛をすべての聖徒たちとともに経験していけるように祈りましょう。

●最後に、20～21節をリビングバイブルで読んでおきましょう。

3:20 どうか、私たちのないうるかぎりの祈り、願い、考え、望みを無限に超えて、つまり、私たちが大胆に願い求め、夢見ることもはるかに及ばないすばらしいことを、その偉大な力でなされる神様に、栄光がありますように。

3:21 どうか、キリスト・イエスによって、教会に救いの計画をもたらしくださった神様に、栄光が永遠にありますように。 アーメン。